



■ 聖路加看護学会ニュースレター

第21号 平成19年3月1日 2007.3.1 No.21

[過去のニュースレター](#)

■ 目次

- 第12回聖路加看護学会学術大会にあたって
- 平成18年度聖路加看護学会学術交流会主催パネルディスカッション
- LOBBY: エッセイ
- お知らせ

■ 内容

第11回聖路加看護学会学術大会にあたって

第12回聖路加看護学会学術大会のご案内を致します。

今回は、メインテーマを『少子高齢社会を生きる力、支える力』としたいと思います。2007年以降、団塊の世代が60歳に達し、わが国の高齢化率は21%を超えようとしています。同時に、出生数が減少し少子高齢化が進みながら、生産年齢人口だけでなく総人口も減少していくという局面に入りました。このような困難な時代だからこそ、いままで以上に、年齢や健康状態にかかわらず一人ひとりの「生きる力」が十分に発揮できるようにすることが重要です。同時に、家族・友人・地域社会において資源や制度を活用したフォーマル、インフォーマルな「支える力」を築いていくことが課題となります。

大会プログラムの会長講演「高齢者・家族の生きる力、支える力と看護」では、高齢者と家族のもてる力と、それと共にある看護について考えたいと思います。シンポジウム「少子高齢社会を生き抜く知恵と技」では、シンポジスト惣万佳代子氏の世代を超えた生活の場の提供、小宮山恵美氏の地域におけるサポートシステムの形成、得居みのり氏の高齢者・家族のための専門看護実践という3人のお話を通して、看護専門職として、一人の人間として具体的実践的に私たちはどうしたらよいのかを討議したいと思います。

会員の皆様には、日ごろの研究、活動成果を、一般演題(口演・示説)、事例検討、交流集会でぜひ発表して下さい。皆様に役立つ学会として学術交流の場をご活用下さい。

また本学会の趣旨でもある専門看護実践の向上を意図し、今回はじめての試みとしてCNS(専門看護師)フォーラムを行うことにしました。これについてもご期待下さい。

皆様にとって明日につなげる機会としたいと思います。ぜひ多数の皆様のご参加をいただきたく、よろしく願いいたします。

第12回学術大会長 太田喜久子(慶應義塾大学)

[▲ ページトップへ](#)

平成18年度聖路加看護学会学術交流会主催パネルディスカッション

平成18年7月8日(土)に、学術交流委員会講演会として、長年衆議院議員としてご活躍の看護職、清水嘉与子先生をお招きし、「看護の社会的貢献—国家資格をどう生かすか—」というテーマでお話しいただきました。当日は約50名の参加があり、学会員以外の大学院生の姿も目立ちました。ここにそのお話の概要をご紹介します。

1. 国会議員としての活動

清水先生は、15年間、厚生省において看護行政に取り組み、そこで目の当たりにした現場の看護師たちの姿から、国会議員に立候補し、看護をとりまく法律を作っていく立場になったという。当時を振り返り、昭和45年に看護師の数が14万人、それに対して准看護師の数が16万人であった状況から、看護師不足問題にどのように対応していくべきか、と

いう問題に対して、准看護師を増やすという政策ではなく、看護師を多く養成し、そしてその看護師が退職しないよう、職場での処遇改善に取り組むという視点で、立法に関与し、看護師のための院内保育所の設置や再就職のサポート機関としてナースバンク（現在のナースセンター）を設立したこと、看護協会が職能団体として組織され、各県において、教育・研修事業を展開できるような基盤を作ってきたこと、そして国が開催する審議会にも看護職の代表が委員として意見を述べるできるようになったことなどの経緯を説明して下さった。

2. これからのわが国の社会保障制度について

また、最近の国会における社会保障制度改革についても触れ、改革された方向として、国民皆保険・国民皆年金制度の堅持、財政健全化対策の推進（在院期間の短縮、介護療養施設の廃止を含む）、疾病治療や介護サービスから疾病予防・介護予防へ、良質な医療提供体制の整備、新たな高齢者医療制度の創設についてその要点を解説した。そして保健師助産師看護師法の改正内容について異論があったと述べ、法案を通すに当たっては、本当にこれからの医療を安心・安全に利用できるのか心配であったとし、健康保険等改正法採決にあたり、付帯決議をつけた理由について説明された。

本格的な高齢社会を迎え、2007年を前に人口が減少を始め、2500年には、日本人が13万人になると予測される中、皆保険制度を維持していくために検討されている財政健全化対策が、真に国民の為になっているのかという視点に立つことが重要である。看護職、特に、大学で教育を受けた看護職たちが、例えば入院期間が短くなり、患者個人にとってそれが良いことであるのかなど、専門家としてその変化を追い、研究やデータに基づき、根拠を持ってそれを報告して欲しい。その結果から、新たな政策提言を行っていくことができると、参加者への期待を述べた。

さらに、今後の日本の行くえについては、悲観論ではなくむしろ楽観論を支持したいとし、長寿社会は人類の理想であり、豊かな少子高齢社会を実現するために必要なのは、社会保障制度改革、技術革新・労働生産性の向上、女性・高齢者の労働参加、健康寿命の増進といった改革であるとした。以前は多くの子供が死んでいた時代があり、それに対して現在は、一人一人の子供が大切に育てられるようになってきたということであり、戦後の急激な人口増に何とか対応してきた社会ではない、安定成長に入った今を、どのように豊かに作り上げていくことができるのかということを考えていくことが重要であり、その中で、女性や高齢者（高齢者の定義自体も変更すべきかもしれない）の労働力をもっと有効に活用する方法を考える必要があると指摘した。そしてその際に、看護職は魅力的な職業モデルとなってほしいとも述べた。

3. 看護が社会貢献するためには

こうした社会の在り方の変化に応じ、看護職員が社会貢献するためには、生活習慣病等疾病予防・介護予防の実践者、医療現場の養成にえられる専門性の高い実践者、訪問看護の担い手、高齢多死時代におけるターミナルケアの支え手、地域における健康相談ボランティア、発展途上国との看護協力プロジェクト推進者、科学的根拠に基づいた看護活動に関する調査研究・評価などさまざまな活動があることを示し、貴重な女性労働力として、少子化の中でも、年間50,000人を超える看護職志望者を維持していくことができるよう魅力ある活動を展開して欲しいと強調した。（男性看護職員も増えてきています。当日は女性しか参加者がおられなかったので、ご容赦を：記録者コメント）

最後に当面の看護問題として、看護基礎教育ならびに卒後研修の在り方を検討していくことと、外国人看護師受け入れの問題を取り上げた。

前者は、現在厚生労働省で検討会が開かれており、看護基礎教育の修業期間を延長してほしいという要望が日本看護協会から出されているが、法律改正が必要となるため、簡単ではないとした上で、准看護師や介護福祉士の資格制度との整合性など、十分な検討をして、きちんとした提案をしてほしいと求めた。また、外国人看護師の受け入れについては、現在フィリピンとの経済交渉として検討が始まっており、日本の看護師国家試験を受けていただくことを条件にしているところであるが、日本で働くフィリピンの方々、親日的になり、技術を身につけていただけるよう見ていきたいし、臨床現場にいる皆様にはしっかりと支えていただくことをお願いしたいとした。

4. おわりに

参加者からの、「大学人として、どのように社会貢献を考えていけばよいのか、国会議員になりたいという人がいたらどうしたらよいか」という質問に対し、「私の話を聞くだけでなく、皆様からの提案をもっと聞きたい。関心のある方は是非いらして下さい。嫌わないでさ！聖路加の先輩方は、これまでたくさん素晴らしい仕事をして下さっていますよ。」とし、私たちに大いなる応援と期待に満ちたコメントを頂戴した。

清水先生と参加者の間の距離がうんと縮まることが、社会貢献につながるように思うと司会者の中村めぐみさんがまとめて下さり、大きな大きな感謝の拍手で、2時間があっという間に終わってしまいました。お暑期中、清水先生、参加者の皆様、本当にありがとうございました。今後ともどうぞよろしく願い申し上げます。

文責 学術交流委員会

[▶ ページトップへ](#)

LOBBY:エッセイ

私たちがこれからの少子高齢社会を生きていくには、変化に対する適応力を持つことが重要であるといわれる。「超高齢社会と向き合う」では、超高齢社会の到来とはどのようなことか、エイジズム、仕事、介護、政策等さまざまな視点から、その適応力を持つための対応を投げかけている。

これから高齢化するニューシルバー（団塊の世代）は、気分が若く、資産があり、家族より自分が大事で、仕事より遊び好きとか。「老いる準備」では、向老学、介護とジェンダー、家族革命としての介護保険等が説かれている。

ぼけても心は生きていることを知ってほしい―「痴呆の人の思い、家族の思い」では、家族会が全国の会員へ調査結果から、ご本人とご家族の心のうちが描き出されている。

(太田喜久子)

1. 田尾雅夫、西村周三、藤田綾子(2003):超高齢社会と向き合う、名古屋大学出版会。
2. 上野千鶴子(2005):老いる準備―介護すること されること、学陽書房。
3. 社)呆け老人をかかえる家族の会編(2004):痴呆の人の思い、家族の思い、中央法規出版。

(現在の会の名称=認知症の人と家族の会)

[▲ ページトップへ](#)

お知らせ

★学術交流委員会

今年度の学術交流会についてお知らせします。気軽にご参加下さい。

テーマ:看護は国境を越えて何ができるのか
日 時:2007年8月4日(土)13:30~16:00 (事前申し込み不要)
場 所:聖路加国際病院2階トイスラーホール
内 容:

1. 米国での国際看護実践者の活動:R. ガーフィールド氏
2. 発展途上国での地域看護強化の人材育成プログラム開発の実情(ケニアの学士課程地域看護学開発協力、ミャンマーでの女性ヘルスワーカー育成協力、フィジーの保健師の継続教育強化協力など):聖路加看護大学他研究班
3. カンボジアでの臨床看護師の活動:聖路加国際病院ボランティア団体「ルカ・ジャパン」

(担当理事:中村めぐみ)

学会誌編集委員会

聖路加看護学会誌編集委員会では、現在第11巻1号の6月の発行に向けた作業を進めており、本学会が目指す「実践を重視した看護学の構築」のための研鑽の場として、学会誌をご活用いただけるようにしていきたいと思っております。

学会誌への投稿は随時受け付けております。学会ホームページに投稿規程を掲載致しましたのでどうぞご覧下さい。

(担当理事:木下幸代、及川郁子)

会計からのお知らせ

2007年度の年会費の納入をお願い致します。昨年度より年会費8,000円になっております。納入をどうぞよろしくお願い致します。

また昨年度までの年会費の納入がお済でない方は2005年度までは5,000×不足年数分、2006年度分は8,000円での納入をお願い致します。

過去の納入状況についてのお問い合わせは、kaoru-osumi@slcn.ac.jpまでお願いします。

(担当理知:田中美恵子、大隅 香)

振込先:郵便為替講座 00100-8-670371
加入者名 聖路加看護学会

庶務より

本学会は、質の高い看護を提供するために看護学の発展に貢献したいと願う看護学探求者の学術交流の場を提供しています。研究に取組んだばかりの卒業生や大学院修了生の方々をはじめ、実践、管理、教育・研究等さまざまな分野で活躍する皆様の研究の成果を公表し、意見を交換する場として是非ご利用ください。入会資格者は聖路加看護大学の卒業生に限られません。一人でも多くの方々のご入会を心よりお待ちしております。「入会のしおり」のご請求は、FAXまたは郵便で学会事務局までお知らせ下さい。3月と4月は異動の時期です。住所等の変更がございましたら、同封の学会専用の勤務先・自宅住所変更連絡用紙で必ず事務局までお知らせ下さい。

(担当理事庶務:高木廣文、鈴木久美)

[▲ ページトップへ](#)

[学会について](#) | [入会案内](#) | [お問合せ](#) | [よくある質問](#) | [学術大会](#) | [ニュースレター](#) | [学会誌](#)

[St. Luke's Society for Nursing Research](#) | [サイトマップ](#)